

学会だより No. 99 2014年6月1日

発行：上智大学哲学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1 上智大学哲学研究室内

TEL：03-3238-3801 FAX：03-3238-4414 郵便振替：00140-8-194788

☆第 80 回上智大学哲学会大会のお知らせ

今夏は下記の要領で第 80 回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

日時：2014年6月22日（日）13：30～17：00

会場：上智大学 12 号館 1 階 102 教室

★プログラム

I 研究発表 13：30～15：45

○小川泰治（早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程）

「二人称的観点」からのカント倫理学との対峙

——ダーウォルによる「理性の事実」の二人称的解釈をめぐって——

○木村恵子（ミュンヘン大学博士課程）

1798 年のカントと「関心」概念

——「諸学部の抗争」における「関心」概念を手がかりに

○芝元航平（本学非常勤講師）

無からの創造と時間

——トマス・アクィナス『世界の永遠性について』を中心に——

休憩 15 分

II 講演 16：00～17：00

○杉山直樹（学習院大学教授）

直観哲学を再考する——現象学の前のベルクソン

III 懇親会 17：30～19：30

会場：上智大学紀尾井坂ビル会議室 1（前回と異なる会場です）

会費：学生 2000 円、一般 3000 円 本学哲学科教員 5000 円

☆講演要旨

直観哲学を再考する——現象学の前のベルクソン

杉山直樹（学習院大学教授）

哲学者にはいくつかのタイプがあるが、いずれにしても一定の過剰、常識からすれば「奇形的」とすら言われる要素なしに哲学はなり立たないと思う。そして今回題材とするベルクソンにも、そうした要素は少なくない。彼の言う「直観 (intuition)」概念をとり上げ、ある意味見慣れたこの概念にたたま込まれている過剰を確認し、そこからどのような帰結ないし課題が与えられてくるのかについていくらか考えてみる。

『物質と記憶』を考察の場を選ぶ。そこでベルクソンは二つのテーゼを提出する——（1）知覚対象は、それが知覚されるまさにその場所において、知覚されている。（2）過去は自動的に自らを保存する。第一のテーゼが関わるのはいわゆる「純粹知覚」、第二のものが関わるのは「純粹記憶」だが、それらはそれぞれに直観の領野を構成している。この主張の意味をときほぐしていきながら、ベルクソンの直観が、通常の意味での「今・ここ」の限定に何ら束縛されていないということを確認する。そして以上に続けて、彼は単に「今・ここ」を前提としてその外へと直観の領野を拡大している、というのではなく、むしろ初めから「今・ここ」を中心とし特権化してしまう実在の分節様式そのもの（それをとりあえず実在の遠近法化と呼ぼう）のほうを相対化したのだという主張を試みる。

いくつかの帰結。まず直観は、現前性から解放されてよい。非現前的直観があるという意味ではない。「現前」自体がまずく構成された観念だということである。あるいは、もし直観の現前性に「なま身の (leibhaftig / en chair et en os)」といった形容を用い続けるとしても、その場合の身体概念は限りない近みとしての「今・ここ」から離脱したというものであってよい。身体を捨象して上空飛翔的な観念論に戻れという意味ではない。身体性と遠近法的体制とを直結させる必要はないということである。また、哲学的概念としての「内在」と「超越」は、遠近法的な展望の不可視の「手前」と、同じ展望についての不可視の「彼方」というプロトタイプとはいったん無縁のところまで再考されてよい。

ベルクソンの時代以降、フランスでは現象学が身体や内在や超越といったキーワードを囲みながら固有の展開を遂げる。その素地を用意したのはベルクソン哲学だと言われることもあるが、少なくともそのような平穏な話は成り立たないということを指摘したい。

☆研究発表要旨

「二人称的観点」からのカント倫理学との対峙 ——ダーウォルによる「理性の事実」の二人称的解釈をめぐって——

小川泰治（早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程）

本発表はスティーブン・ダーウォルの「二人称的観点」にもとづく倫理学の立場から、カントの道徳法則の正当化の試みの検討を行うものである。

周知のように、カントは『道徳形而上学の基礎づけ』（以下『基礎づけ』）の第三章で、道徳法則が現実に拘束力を有することを示すため、自由の「演繹」を試みている。翻ってそれに続く『実践理性批判』においては、自由の「演繹」という戦略は採用されず、道徳法則の意識の事実性、すなわち「理性の事実」に最終的な論拠が置かれるようになる。だが、『基礎づけ』『実践理性批判』いずれの方法にせよ、定言命法の妥当性の根本にかかわるカントの論証の試みは、様々な疑問を残すものであり、必ずしもこれまでの解釈者たちを納得させるものではなかった。したがって、道徳的な規範性の源泉をどこに求めるのか、つまり結局のところ我々が道徳的に生きる「べき」なのは どうしてなのかという問いは、カント倫理学に対し依然問題として提起され続けている。

以上の問題に対し、現代の英語圏の倫理学者スティーブン・ダーウォルは、道徳的規範およびそれにかかわる諸概念の一切は根本的に二人称的かつ行為者相関的な概念であるという立場から、独自の仕方でもカント倫理学と対峙している。彼によれば、カントの実践哲学の主要概念である自律や定言命法、人格の尊厳は確かに重要な意義をもっているが、『基礎づけ』から『実践理性批判』に至るカントの一連の論証は一人称的な熟慮に基づくために失敗に終わっている。そこでダーウォルが代わりに提案するのは、道徳法則と人格の尊厳とは我々が二人称的に熟慮することで不可避に前提されるとする解釈である。その解釈では、道徳法則や自律ではなく、道徳的な責任概念を介して「理性の事実」を二人称的に理解することで、道徳法則の正当化が試みられている。

本発表では上記のようなダーウォルのカント論の是非を、彼の主著『二人称的観点：道徳性、尊敬、責任』の検討のほか、コースガードらとのあいだでの論争の批判的検討を通して論じる。ダーウォルの解釈はカント自身の議論には欠けているように思われる他者性を積極的に導入するものであるため、その検討によって、カント倫理学において二人称性ないし他者性を論じる意義と可能性を提示したい。

*

1798年のカントと「関心」概念

——「諸学部の抗争」における「関心」概念を手がかりに

木村恵子（ミュンヘン大学博士課程）

カントは『諸学部の抗争 1798』において、「直接的関心」という概念を以下のように使用している。「数学者が（別の意図のために使う道具としてではなく）、この点に『直接的関心』を抱くならば、彼はその限りで哲学者でもある」（VII102）。ここで彼が関心を抱いている「この点」とは、「自らの認識が拡張すること」（*ibid.*）である。カントによれば哲学は「理性の究極目的（これはある全体的統一である）の全体に関心を寄せるので、一つの力の感情を伴う」（*ibid.*）。それゆえに、「（哲学者）は、自らの力を認識の拡張という刺激から得られる恩恵を享受する」（*ibid.*）とカントは宣言する。すなわち哲学者には、認識においても力学的な直接的関心がある。

1780年代のカントは『道徳の形而上学の基礎付け』において「直接的関心」を経験に依存しない「純粋な関心」と言い換え、実践哲学の原理として使用しているようにも思われる。しかしそこでの「直接的関心」は、「自由」の概念を懐疑論者から守るために、「論理的な関心」ではないという消極的な説明に留められている。これに対して『実践理性批判』では、道徳法則への尊敬感情が「道徳的関心」と言い換えられており、「純粋な関心」は「感覚的に自由な関心」（V79）であるとされる。「関心」概念は「動機」概念から発生し「格率」概念へと向かうが（*ibid.*）、その際、経験的習慣という悪への傾向性一般は否定され、格率の採択において例外を許容しないよう命じられる。

しかし、これらの方法は自然の範型によって正当化される道徳性の論証に過ぎず、自然概念との類比により自由概念を示すのみで、理性はその全体を捉えることはできない。その結果、人間理性は自らの力を発揮できないことになる。『判断力批判 1790』において、カントははじめて「直接的関心」を経験的なものとそれとは異なる知的なものとの区分する。その区分の仕方は人間の自由を基準としている。本発表では1780年代のカントの実践哲学の問題を前提とし、1790年代の彼の超越論哲学を反省する。それによって、形式的だといわれるカントの形而上学に豊かな内容を与えることが本発表の目的である。

*

無からの創造と時間

——トマス・アクィナス『世界の永遠性について』を中心に——

芝元航平（本学非常勤講師）

周知のように、トマス・アクィナスは、世界は常に存在していたのか、それとも世界

は存在し始めた——すなわち世界には時間的な始まりがあった——のかという、アリストテレスの受容がきっかけとなって 13 世紀後半に大論争を引き起こした問題に対して、信仰によっては世界は時間的に存在し始めたと言うべきであるが、そのことを理性的論拠によって哲学的に証明することはできないと主張した。トマスはこのような主張を行ったことで、世界に始まりがあったということは論証されうると主張したボナヴェントゥラを代表とするフランシスコ会学派から反発を受けることとなった。とりわけ、トマスがパリ大学の神学教授を二度目に務めたのと同時期に神学教授に就任したフランシスコ会士のジョン・ペッカム (John Peckham 1225/30 頃 - 92 年) は、世界が始まりを持つことは、神が創造より前に存在したということに基づいて理性によって証明されうると主張し、トマスを痛烈に批判した。

トマスは、この時期に著された論争的著作である『世界の永遠性について』(1270 年)において、世界が無限の過去から常に存在したということが「可能であった」と明確に認めている。このような明確な立場は、『神学大全』を含むそれまでの著作では見られなかったものであり、注目に値するであろう。本発表では、トマスが同書においてどのような論証を行っているのかを、トマスの他の著作における並行箇所やペッカムの主張との比較を通して解明したい。

ところで『世界の永遠性について』という表題は、トマスの思想を前提として考えると奇妙な題名であると言うべきかもしれない。というのも、トマスは「永遠性」を本来的には神に固有なものとして理解しているからである。そこで、本発表では、トマスの永遠性の概念との関連にも注目することにしたい。

☆第 79 回上智大学哲学会大会報告記

去る 2013 年 10 月 27 日 (日) に第 79 回上智大学哲学会大会及び哲学科 100 周年記念講演会・シンポジウムが催されました。この大会では、午前中に、堤田泰成氏 (本学博士前期課程) による「生理学と美の形而上学を繋ぐもの——ショーペンハウアー『意志と表象としての世界』続編における天才の思慮について」、山本剛史氏 (慶應義塾大学非常勤講師) による「オイコスの倫理学へ——ヨナス責任倫理学の形成」と柿木伸之氏 (広島市立大学准教授) による「翻訳から言葉を見つめ直す——ベンヤミンの言語哲学を手がかりに」と題する研究発表が行われました。また、午後には、哲学科創設 100 周年記念講演として本学哲学科卒業生の水谷修氏 (関西大学及び花園大学客員教授、82 年卒) に「こころを病む子供たち——その背景と対策」という題名で講演をいただきました。また、100 周年記念シンポジウムでは、「哲学科で学んだこと——回顧と展望」という題目で、七人の卒業生の方にお話いただきました。第一部には、波多野稲子氏 (旧姓菅原、82 年卒、小説家 (ペンネーム・久美沙織))、塩川千夏氏 (87 年卒、成蹊中学・高等学校教諭)、松本佳代子氏 (99 年卒、中央公論新社 学芸局 学芸編集部)、武重有紀子氏 (04

年卒、医療法人社団哺育会 横浜相原病院 臨床心理士)にご登壇いただき、また第二部には、森一弘氏(61年卒、カトリック司教、(財)真生会館理事長)、渡部久仁子氏(旧姓細野、73年卒、主婦)、峯岸正典氏(77年卒、曹洞宗 長楽寺住職)にご登壇いただきました。司会は大橋容一郎本学哲学科教授(75年卒)が務めました。とても和やかな雰囲気の中、様々な年代における哲学科のエピソードをご披露いただき、またフロアとの質疑応答も活発なやりとりがなされたことをご報告いたします。

なお、シンポジウム登壇者の皆様に執筆いただいた原稿は『哲学論集』第43号に掲載予定です。どうぞご期待ください。

※講演報告

「こころを病む子供たち——その背景と対策」

水谷修(関西大学及び花園大学客員教授、82年卒)

哲学科創立100周年記念ということで、いつもの大会で行われる小難しい講演ではなく、今回は「夜回り先生」で有名な水谷修先生による講演が行われた。先生は上智の哲学科卒業で、今回の講演はそれにちなんで、心を病んだ子供に対して哲学ができること、すべきこと、という応用哲学的なテーマで行われた。

多くの子供が、様々な家庭・学校環境を要因とする後天的な心の病で苦しんでいる。水谷先生はそんな子供を救うための活動を続けてきた。社会全体のイライラが、弱い立場の子供に向かってしまい、こうして子供が苦しめられ、子供の心が歪められ、崩れる。ではそういう子供をどうやって救えるのか。先生は、環境要因に基づく心の病に対して安易に精神科の薬に頼ることに反対する。また先生は、カウンセリングによって子供を救うことも容易ではないと考える。先生によればカウンセリングは本来、心を病むに至った原因を探り論理的に理解させながら、自らを救わせようとするものだが、多くの日本人はそのような論理的思考能力に欠けており、また日本のカウンセラーの質は低い。よってこのような論理的・心理学的アプローチもあまり成功を見込めない。

そこで水谷先生は三つのアプローチを提示する。一つ目は、身体的方法である。心身一如の考えに基づき、心を健全にするために体を健全にする。太陽の日を浴び、運動をする。そうすれば体が疲れ、気持ちよく眠れ、次第に心は健康を取り戻す。二つ目は、超越的方法である。心を病んだ子供を寺や教会といった宗教的施設に入れる。多くの人間は何か超越的なものにすぎることによって生きる力を得る。この二つの方法は実際に効果を発揮している。だが、水谷先生はそれに加えてもう一つの方法を提示する。それは先生が「超越論的」と呼ぶ方法であり、これは身体的方法と超越的方法とが織り交ざったものとされる。残念ながら今回の講演ではこの超越論的方法に関しては詳しく説明されなかったが、先生はこの方法を今後体系化していく、と意欲を覗かせた。

なぜ子どもは心を病むのか、その病をどうやって治せばよいのかと考え続ける先生の姿勢には、哲学がもつ「考える力」が生きているように私は感じた。しかし、哲学が心

を病んだ子供を救う上で具体的にどのように役に立つのか、そもそも役に立つのか、という点はあまり明らかにされなかったように思え、哲学者にとって厳しい現実を突きつけられたようにも感じた。ただ、先生の講演を聞き、哲学にもできることが一つあるようにも思えた。それは学校に哲学教育を導入し、子供たちに論理的思考能力を身につけさせることである。この力が身につけば、先生が否定した論理的・心理学的アプローチもある程度有効になるのではないか。また子供が、自分のストレスを弱い立場の人間にぶつけることが間違っていると自分でしっかりと考え判断できるようになれば、将来、日本の社会はもっと健全なものになるのではないか。

哲学に何ができるのか。先生の講演はこのことを聴衆に真剣に考えさせるような力強い講演だった。

(記:本学博士後期課程 中村信隆)

☆事務局からのお知らせ

◆新入会員（五十音順に掲載）

新居健、池田隼人、江藤信暁、遠藤さおり、大月貴生、大貫綾乃、大沼楽、河合一樹、草間毬花、小山祐樹、佐々木優、鈴木香奈、高橋なつき、田中翔太、田中麗子、丁嘉倫、出口悠梨、富岡夏海、永井玲衣、萩原杏奈、畑中十夢、星川久美子、松尾愛理、松本滯、望月文博、芳原和彦、漁野大地

◇【Facebookページ開設のご案内】上智大学哲学科創設100周年記念大会の開催にあわせて、上智大学哲学会のFacebookページを開設しました。当日の講演会、シンポジウム、懇親会の写真もアップされていますので、下記のURLよりご覧ください。Facebookアカウントをお持ちの方はコメントを記入することができますし、アカウントをお持ちでない方も閲覧は可能です。上智大学哲学科の卒業生・在校生のみなさまが相互につながり、交流するメディアの一つとして活用して頂ければ幸いです。<https://www.facebook.com/sophia.philos>

◇住所や電話番号の変更、所属等の移動があった方は、会費納入の郵便振替表の通信欄・葉書・メール (saro hoop@hotmail.com) 等で事務局までお知らせください。お送りしたものが「転居先不明」で返送されてくるケースが毎回散見されますので、ご協力をお願い申し上げます。とくに新入会員のみなさまで今年4月以降住所を変更された方は、入会后通信物が一切届かないということにもなりかねませんので、忘れずお知らせください。

(記:事務局 佐良土茂樹)

『哲学論集』原稿募集

『哲学論集』第44号（2015年10月刊行予定）に掲載する研究論文を下記の要領で募集いたします。

- 提出締切：2015年4月末日消印有効
- 字数制限：注を含め16,000字以内（400字詰め原稿用紙40枚以内）
- 注意事項：原稿は、計5部を提出すること。ワープロ原稿（パソコンのもの）であることが望ましい。注込みの字数を必ず明記すること。
論文掲載権は、編集委員会に一任される。
※字数に関する規定が厳密になりましたので、注意してください。

【投稿先】

上智大学哲学会事務局

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学哲学研究室内

※原稿は持ち込みか、郵送をお願いします。

※問い合わせに関しましては、電話・ファックス・電子メールでも結構です。

TEL：03-3238-3801 FAX：03-3238-4414

E-mail：sarahoop@hotmail.com